

## 編集後記 From Editor

植木鉢が並ぶ路地の向こうには、草屋根の建物（明治時代の長屋を再生した複合商業施設「憩」、大阪市中央区）



以前、博物館で縄文の火焔土器や土偶を見たことがある。それらは、土で作られて焼かれたもの。太古の人たちは、こうしたものを、どんな思いをこめて作ったのだろうか。もちろん、現代人の私には分からない。ただ、その燃え立つような形状や大胆な表現からは、大地と生命の根源性のようなものが伝わってくる。

現代の社会では、土に関わるこうした精神性は、かなり希薄になっているのは確かだろう。それでも、まだそのすべてが失われてはいないことにも気がつく。例えば、子どもにとって土は宝の山だ。地面を掘るといろいろなものが出てくる。草の根っこや木片、錆びた釘に色ガラスのかげら、それにミミズやダンゴムシ。大人から見るとガラクタのようなものでも、子どもには大切な宝。子どもは本能的に土を掘り、泥だんごを丸める。

小学生の頃、私もザリガニ捕りに夢中で、平気で泥の中に入っていたことを思い出す。夏になると近所の川で、友だちと一緒にナマズを捕った。手分けをして水に入り、ナマズを浅瀬に追い込んでから網ですくった。無我夢中で、どの子も泥だらけ。当時はそのまま家に帰ったが、親にさほど怒られることはなかった。家の表で裸になって水を被り、着替えて縁側でまた遊んだ。

今はどうだろうか。マンションだと泥だらけのまま屋内に入るときっと大目玉。洗濯も大変だし、室内にも泥が飛ぶ。いつの頃からか、土や泥はただ汚くて不衛生なものになってしまった。現在では、住まいの周りに以前ほど土はない。土間も縁側もなく、家の内と外がはっきり分かれている。

「節電」が合い言葉だった今年の夏、多くの家庭では、クーラーをなるべく使わず、窓を開けて風を通す暮らしが見直された。これを機に、緑のカーテンづくりにも励んだ人もいただろう。近年はベランダや路地で花木を育てるだけでなく、コンテナなどで野菜作りをする人も増えている。土いじりや緑に接することで幸せな気持ちや喜びを感じる人はきっと多い。なかには、土や緑を介した近所付き合いから、交流の輪を広げる人もいることだろう。

都会の中でも、雨の降り始めに、ほのかに土のおいさが漂ってくると、心が少しなごむような気がする。夏には土から出てきたセミがなき、秋には虫の音が聞こえる。土のある暮らしというのは、生命の存在を身近に感じながら日々を生きるといってもあるようだ。

—— 京 雅也

表紙写真 INAXライブミュージアム内にある「土・どろんこ館」は土がテーマの体験型施設。子どもたちは「光るどろんこづくり」をしたり、屋外広場のどろん田で遊び、どろんや土の感触を体感する（愛知県常滑市）

裏表紙写真 寺院の土壁が続く道（奈良市、東大寺付近）／「職人社 秀平組」事務所の壁に掛けられた土壁サンプル（岐阜県高山市）／花々や花木が一面に植えられた大阪市役所屋上

## CEL 97号 特集 ■ 土のある暮らしと文化

発行●平成23年10月1日 頒価1,000円（送料別途）

■発行 大阪ガス(株) エネルギー・文化研究所 (CEL)  
〒541-0046 大阪市中央区平野町4-1-2

■発行人 木全吉彦 *Yoshibiko Kimata*

■編集人 京 雅也 *Masaya Kyo* / 弘本由香里 *Yukari Hiromoto*

編集●関西ビジネスインフォメーション(株)内 CEL編集室  
〒530-0005 大阪市北区中之島3-2-18  
住友中之島ビル7F TEL.06-4803-2307

印刷・製本●日本写真印刷株式会社

RESEARCH INSTITUTE FOR CULTURE, ENERGY AND LIFE © 2011 OSAKA GAS CO., LTD.

禁無断転載複製

※本誌掲載の寄稿文、インタビュー、レポートなどの内容は必ずしも大阪ガスの見解を表すものではありません。本誌・バックナンバーのコンテンツやエネルギー・文化研究所(CEL)の活動内容はインターネットホームページ[<http://www.osakagas.co.jp/company/efforts/cel/>]でご覧いただけます。

本誌に関するお問い合わせ、ならびにご購読申し込みや送付先変更等のご連絡は CEL編集室 Tel.06-4803-2307 Fax.06-4803-2210 [cel@kbinfo.co.jp](mailto:cel@kbinfo.co.jp) まで